

主張し過ぎずに主張する存在。  
それがジオバンナの狙いなんです。



STYLE  
04  
WHEEL & RACING

## KOKO KUTURE SARDINIA-5

Text : 中三川大地 Daichi Nakamigawa  
Photo : 小林邦寿 Kunihisa Kobayashi

目 のくらむようなクロームフィニッシュや、色とりどりの装飾品、あるいは30インチが射程圏内に入るような大口径化など、アメリカラグジュアリー系ホイールブランドは、その華麗さとゴージャスさを競い、目立った者勝ちみたいな印象を世に植えつけてきた。

その第一人者に数えられるのがジオバンナ。日本でのイメージにおいてそれは正解だろうが、どうやら根底に流れる精神は違う部分にありそうだ。そう気が付いたのは、ジオバンナブランドのインポーターを務めて早13年あまり、常に最先端の流行を取り入れ、時に自らで流行を創り上げてきたT2DFの代表、金子 哲氏のスタイルを垣間見たからだ。彼は驚くほど自然体で、まるで洗いざらしのカジュアルシャツを羽織るような感覚でジオバンナと接する。そこにはラグジュアリーホイールだからと気負う部分はまるでない。

例えばこのメルセデス・ベンツML350ブルーテックに装着されるのは、ジオバンナの中でも特に、洗練されたシンプルな美を追究したKOKO KUTURE (ココ・カチュール) ブランドのSARDINIA-5 (サルディニア・ファイブ)。マットブラック・フェイスの側面にマシンドボールカットが入り、わずかながら金属の主張を見せるそれは、前後とも22インチで、ラグジュアリー界の常識に当てはめて考えれば大人しい存在のように思える。だが、それこそがジオバンナの実像。そこには「洗練」という美学が見えるという。

「ジオバンナって言うと、ガラガラと飾り立てたイメージが

日本で根付いている感がある。もちろん、その世界は確かに存在すると思いますし、否定するつもりもまったくありません。だけど元来、彼らはとてもシンプルな造形を生み出し、その中にそこはかとなく個性を宿らせるホイールブランドでした。近年はその傾向がより強く、とりわけシンプルでエレガントなイメージを訴えたココ・カチュールでは、その方向性が色濃く示されています」と、金子氏は述べる。

ゴージャスでエレガント、そこに機能美までを植え付けたジオバンナに対して、ココ・カチュールではもっとシンプルさを強く訴えてきたという。それこそ、ブランドを牽引するディコ・スライアン社長が狙うものであり「主張し過ぎずに主張する」というコンセプトを色濃く表現する。そうした方向性をいち早く察知した感度の高いカスタマー達は「ノーマル車両にさりげなくジオバンナを」といったアプローチを企てており、金子氏もそうしたニーズを理解し実践する。

「最近ではホイールの軽量化に伴うばね下重量の低減を図るのがジオバンナ流。ドレスアップといっても、走行性能は二の次というのでは信頼を得られませんから」と、話を続ける金子氏の言葉を裏付けるように、昨今の新製品はそのどれもが、巻にあふれる鍛造ホイールを凌ぐほど軽い。同じく軽量化に優れたヨコハマタイヤのPARADA Spec-Xと組み合わされば、驚くほど軽快なドライビリティが手に入るはずだ。ジオバンナホイールブランドは、今、身も心も軽やかに付き合えるラグジュアリー系ホイールである。』



アメリカンラグジュアリーホイールの代名詞、ジオバンナホイールを日本に伝道してきた男は、いま飾らずシンプルにジオバンナと接する。個性をこれみよがしに主張しない「素の美」こそが、ジオバンナ製ホイールには宿っているという。

## 洗練と信頼。

Voice

T2DF金子代表が語る  
Giovannaとの関係。



ジオバンナホイールの日本における輸入代理店を務めるジオバンナホイールズジャパン(T2DF)と共に、キャデラック・シボレー国立(STG)として正規ディーラーの代表も務める金子 哲氏。リアルなアメリカンカスタムシーンと直に接しながら、トレンドをどん欲に吸収し日本へと輸入してきた。「ジオバンナホイールに関して言えば、取り扱いを始めて13年あまり、日本にジオバンナを根付かせ後生に残したいという想いをディコ社長と共有して、ここまでやってまいりました。ホイール供給だけでなく、ひと昔前ならハマーH2、昨今ではカマロで実現させた特別仕様「ジオバンナ・エディション」のような、我々からの発信も続けていきたいと思っています」